

天候不順（曇天・多雨・日照不足）に対する農作物の栽培管理について

平成27年4月16日

農業技術課

1 水 稲（育苗）

- (1) 育苗期に寒暖差が大きいと出芽の不揃い、ムレ苗、立枯性病害等の障害が発生しやすい。低温時には保温シート等を利用し、床内温度の低下を防ぐ。
- (2) なお、降霜日は晴天となることが多く、早朝に低温であっても日中は施設内や被覆資材下の温度が急上昇しやすいので、換気により適温管理を徹底し、苗の焼けやムレを防止する。
- (3) 過湿になると立枯性病害が発生したり、苗が徒長するので、灌水量はやや控えめにする。

2 果 樹

- (1) 開花期を迎える品目（もも、なし、りんごなど）は、天候不順により放花昆虫の活動が鈍ることが予想されるので、人工授粉を励行する。
- (2) 湿害に弱いりんごM.9自根台木樹や、根域が浅い果樹の若木などは、雨が多くほ場内に滞水すると、生育が弱まる恐れがある。滞水しやすい場所に明きよを設置し、排水を促す。
- (3) 湿度が高い状態が続くと、りんご・なしの黒星病、もも・日本すもも・プルーンなどの花腐れ（灰星病）などの病害発生リスクが高まるので、防除に留意する。特に黒星病は防除間隔を開けないようにする。

3 野 菜

- (1) 明きよ等ほ場に滞水しない対策を徹底し、根張りの確保を図るとともに、降雨後、直ちにブームスプレーヤー等での防除作業ができるよう、ほ場条件を整えておく。
- (2) 露地に定植したものは、曇天・多雨・日照不足により根群の発達が悪く、降雨後の晴天や気温の急上昇等、急激な気象変化の影響を受けやすい状態となっているので、適切な管理作業（被覆資材の使用等）に努めるとともに、病害の予防防除を徹底する。また、病害の発生が例年より早まることが予想されるので、ほ場をよく観察し、今後の天候によっては、早めに被覆資材を外して、防除に努める。
- (3) 施設栽培の果菜類では、降雨後の晴天や気温の急上昇等、急激な気象変化に対応した適切な温・湿度管理（換気・通風）に努める。整枝や摘葉は晴天日に行い傷口からの病原菌の侵入を防ぐとともに、予防防除を徹底する。また、変形果や傷果などを中心に通常よりもやや強めの摘果を行ったり、出荷規格の範囲内で若穫りを行うなど、初期の着果負担を軽減し、根群の発達を促すような管理に努める。
- (4) 育苗中のものは、適切な温・湿度管理とかん水、日照の確保等により、健全な発育を図る。

4 花 き

育苗床や定植後、採花中のほ場では、日照を確保するため昼間は内張りカーテン等を解放し、光線の確保に努める。ただし、曇雨天が連続した直後の晴天日には、一気に解放せず慣らしを入れ、開放することにより葉焼け等の回避に努める。